

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ① 日本地理教育学会

(代表者 田部 俊充 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

#### 1 前文

本年度の問題数は30問で、乾燥地域の生活文化、地域調査、世界の自然環境と自然災害、衣料品類の生産・流通・再利用・再資源化、人口と都市、ドナウ川・ナイル川・メコン川流域の地誌の大問より構成され、各大問はそれぞれ4～6の小問より構成されている。全体的に基本的な問題が多い。「地理総合」は「B 国際理解と国際協力」の「(1) 生活文化の多様性と国際理解」、「C 持続可能な地域づくりと私たち」の「(1) 自然環境と防災」、「(2) 生活圏の調査と地域の展望」、「地理探究」は「A 現代世界の系統地理的考察」の「(1) 自然環境」、「(2) 資源、産業」、「(4) 人口、都市・村落」、「(5) 生活文化、民族・宗教」、「B 現代世界の地誌的考察」の「(2) 現代世界の諸地域」から出題されている。

大学入試センターは、問題作成方針を公表し、以下の点を示している。①知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題を重視する、②各教科・科目の特質に応じた学習の過程を重視した問題を作成する、③学習指導要領に準拠するとともに、教科書を基礎とし、特定の事項や分野に偏りが生じないように留意する、④問いかけや資料の提示の仕方、レイアウトを工夫し、表現や体裁に配慮する、とくに地理に関しては、地理に関わる事象を多面的・多角的に考察、構想する過程を重視するとある。また、地域を様々なスケールからとらえる問題や、地理的な事象について既有知識を基に推論したり、資料を基に検証したりする問題、系統地理と地誌の内容を関連付けた問題を検討すると示されている。これらの点については、総評・まとめで述べる。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 乾燥・半乾燥地域の生活文化の多様性に関する大問である。昨年度は、地球的課題と生活文化の二つの観点から出題されたが、本年度は生活文化からのみの出題となった。学習指導要領が示している自然環境との相互依存関係に着目して、世界の特色ある生活文化について考察する問題が出題されており、受験者の学力を適切に測ることができる大問である。一方で、出題が自然環境と生活文化に偏っていることや、学習指導要領が示す文化の変容や国際理解を主題とする問題は見られなかったこと、大問全体を通した問いの設定や問いを設定して探究するといった学習場面の設定は見られなかったことが課題としてあげられる。次年度以降の出題に期待したい。

問1 モロッコ内陸部の乾燥地域の住居と農業について問われた小問である。乾燥地域における自然環境と住環境、農業とのかかわりに関する知識が問われている。

問2 生活用水の確保をテーマに乾燥地域の3地点の水の利用について問われた小問である。図から標高を読み取り、各地点に関する知識と組み合わせて生活用水に関して考察する力が求められる。しかし、標高を用いて考察するのはウ地点のみであることから、各地点に関する知識が問われている印象を受ける。

問3 ある地点の雨温図と生活文化の特徴に関するメモをもとに、南アメリカ大陸のどの地点であるかについて問われた小問である。標高などの図がないため、南アメリカ大陸のどの地点でどのような気候がみられるかの場所に関する知識を問われている印象を受ける。地点問

の比較の視点やなぜそのような文化がみられるのかを考察したい。

問4 牛と羊、ヤギの分布とモンゴルのヤギの飼育頭数増加に関して問われた小問である。自然環境と家畜分布の関係性と、モンゴルのヤギの飼育頭数増加の背景が問われている。文化の変容や国際理解に触れられるとさらによいのではないか。

第2問 津軽平野とその周辺地域を事例とした地域調査に関する大問で、「地理総合」の中項目「生活圏の調査と地域の展望」からの出題となる。資料を読み解くうえで難解な問題はなく、取り組みやすい問題が揃った。昨年と同様に計4問から構成されているが、地図に関する基本的な地理的技能を活用した問題が1題あると、より「地理総合」に合致した大問になっていたと考えられる。

問1 津軽平野とその周辺地域の農地や農作物のようすをもとに、三つの市における農作物の品目の特徴を判断する小問である。三つの市の地図上での位置と景観写真を照合しながら統計を読み取る形式は、地理的な見方・考え方に基づく基本的な問題として評価できる。

問2 地形図をもとに、ため池の造成方法と決壊時の浸水被害について考える小問である。後者について、地形図上の等値線の判断は、等高線がなくほぼ平坦であることから、浸水深ではないことが判断できる。また、「浸水までの時間」とは「浸水到達時間」のこと、「値が大きくなる」とは「到達までの時間が長い」ことであり、きちんと解釈することでも解答可能である。ある事象を別の表現に代替する力も必要であるが、受験者が現地にいることを想定して、想像力をはたらかせて解答することに重点が置かれた問題を期待したい。

問3 十三湖におけるシジミ漁の持続可能性に関する小問である。特定の地域性への理解がなくても、汽水湖、干拓、持続可能な漁業の在り方、地域の特産品のブランド化に関する知識があれば十分に解答でき、平易な問題であった。

問4 リンゴの輸出入に関する統計を題材とした小問である。どの国が東南アジアに該当するのか、アメリカ合衆国、日本、チリがそれぞれ北半球、南半球のどちらに位置しているかの理解が解答する上での前提となっている。リンゴの旬の時期が理解できなくても解答できるところに改善の余地があると思われるが、「地理総合」から中学校社会科地理的分野で学習するような基本的知識をベースとした出題は、中高の学習内容を接続する意味で意義深い。

第3問 世界の自然環境と自然災害に関する大問である。世界各地の地形や気候は毎年出題されている。自然災害については、「地理総合」の「地図や地理情報システムで捉える現代世界」をふまえ、「持続可能な地域づくりと私たち」の「自然環境と防災」を意識した内容となっている。いずれも写真、地図、統計資料を参考に考察を行うが、判読に迷う問いもあり、難易度はやや高いといえる。

問1 海底地形とその場所に関する小問である。写真と地図の組合せを選ぶものであるが、基本的な地形と代表的な位置が問われており、基礎的な知識で解くことができる。難易度は高くない。

問2 世界の3地点における大気中の二酸化炭素濃度の推移に関する小問である。ハワイの二酸化炭素濃度の推移のグラフは、2025年の追・再試験・第3問(問5)でも出題されている。南北半球、季節、植物の光合成が盛んな時期を総合的に考察しなければならず、解答に時間を要す。的確な読図力・判断力が問われており、良問といえる。

問3 日本の土壌に関する小問である。世界の土壌については度々出題されているが、日本に限定した土壌の出題は珍しい。初見の地図なので戸惑うかもしれないが、火山帯や沖積平野の位置から判断できる。良問であるが、地図が読み取りづらいのもう少し拡大した方が良かったらう。

問4 北アメリカの湿地・湖沼の分布に関する小問である。基本的な地形および植生が聞かれており、判断に迷うことはない。湿地・湖沼の分布を地図上に灰色で示してあるが、この分布が示されていなくとも答えを導くことができるため、もう一ひねりほしいところである。難易度は低い。

問5 世界の水資源量に関する小問である。地域別に組み合わせを求めるもので、共通テストらしい問い方である。各地域の人口および気候環境が想起できれば解答は容易である。難易度は高くない。

問6 火山噴火のハザードマップに関する小問である。融雪型火山泥流と土石流の判断が難しい。複数の因子や影響を考慮する必要があり、解答にかなりの時間を要す。語句の説明や必要な情報は予め地図上に示されており、地理的な深い思考力と判断力が必要とされる良問である。難易度は高い。

第4問 人々の暮らしに身近な衣料品類のサプライチェーンを媒介に、日本ないしは関係各国における産業・貿易構造やそれに起因する様々な諸課題について考察させることを意図して出題した大問と考えられる。サプライチェーンのあり方が問い直されるとともに、循環型社会への移行が叫ばれるなか、本問が設定されたことは極めて意義がある。それとともに、探究的な活動を通して自身の生活と現代世界との接点を見出すという意味から学習指導要領の趣旨にも合致しているといえる。各小問は、主題図や統計、グラフなどの資料を読み解き、そこから判断したことを選択肢と合致させて正解を導いていく形式であり、基礎的な知識をベースに思考力・判断力が求められる類のものであった。問題の難易度としては全般的に平易で解答しやすいものと判断できる。

問1 亜麻、ジュート、綿花各々の生産国の分布の組合せを選択する小問である。亜麻の分布を推測するのは難しいが、教科書や資料集にも必ず取り上げられる綿花やジュートの生産分布が理解できていれば、選択肢を推測するのは容易である。

問2 日本の化学繊維製造業と綿紡績業の総事業所数と立地都道府県の特徴について1967年と2021年とを比較し、後者の化学繊維製造業に該当するものを選択する小問である。事業所数の変化の増減からいずれの産業かを判断することは容易である。大阪はかつて「東洋のマンチェスター」と呼ばれ、多くの若年女子労働力を利用して綿紡績業が発展した。

問3 日本における衣料品の主要輸入相手国である韓国，中国，バングラデシュ，ベトナムからの輸入額の変化（2003年～2023年における10年ごとの変化）を，2013年を100とする指数で示した統計資料の中からバングラデシュに該当するものを選択する小問である。同国に安価な労働力を背景に中国などから生産拠点が急速にシフトしていること，輸入額については新興国として製品の付加価値化が進んでいるベトナムと比較して少ないことから判断が可能である。

問4 衣料品・身回品小売業の店舗立地の特徴について，飲食料品小売業，自動車小売業との比較から考察する小問である。グラフに示される飲食料品小売業の店舗立地の割合が最も高い場所が郊外から人々の集まりやすい都市中心部であることは容易に判断できる。同様に，衣料品も飲食とともに生活に身近なものであるゆえに，同様の傾向を示すものと判断できれば解答は容易である。自動車小売業の店舗の割合がロードサイドにおいて高いことは容易に理解できるはずである。

問5 中古衣料品の輸出額と輸入額を示した二つの主題図から後者のものを選択するとともに，中古衣料品の再利用・再資源化の現状についての説明文の読み取りから国際的なアパレル企業の本社が多く立地している企業をASEANとEUのいずれかを選択する小問。中古衣料

品が大量生産・消費の進む先進国や新興国で多く輸出されること、環境政策の進展するEU内でそれが再利用・再資源化されるために輸出入がなされていること、一方で慈善事業の一端としてアフリカ中南部に輸入が集中して見られることが理解できれば解答は容易である。

第5問 人口と都市に関する大問で、表やグラフなど満遍なく様々な表現が使われているうえ、グローバル化に伴う人の国際移動や、日本の国土像についての統計データの判別を中心に構成されており、標準的で、事前の学習成果が十分に発揮できる良問が多いといえる。また、図や表から読み取る問題の形式として、三つ以上の正誤を問う形式は出題されていないため、受験者は取り組みやすい形式であったと考えられる。

問1 人口密度と1人当たり穀物生産量から、各地域の人口増加や労働生産性から答えを導く小問である。人口増加が著しいアフリカは人口密度も高く、アフリカと比較して、南アメリカはヨーロッパ起源の商業的農業が広がっているため労働生産性は高いと考えることができれば判別ができる。

問2 グローバル化における国境を越えた人の移動に関する小問である。インドネシアをはじめとしてフィリピンやインドなどアジアの国々からは出稼ぎのために国外に居住する人口が増えていることから、インドネシアの判別は容易である。アラブ首長国連邦とフランスの判別はやや難しい。

問3 先進国（スウェーデン）、発展途上国（マリ）、新興国（メキシコ）の自然増加率と人口ピラミッドの年次変化を問う典型的で比較的平易な小問である。自然増加率は「出生率－死亡率」によって算出されるため、その国・地域における出生率や死亡率の増減を考えれば答えを導くことができる。

問4 アメリカ合衆国の二つの都市圏における管理的・専門的職業と生産・輸送職の割合を問う小問で、難易度のやや高い問題である。ニューヨークは、経済のサービス化により第三次産業の割合が高いはずであり、管理的・専門的職業が多いと判断したい。デトロイトは自動車工業で栄えた都市であることは必ず学習しているはずで、判断可能である。

問5 2023年度追・再試験、2025年度追・再試験で類似の指標が問われている、都道府県別の産業や生活環境の差に関する小問である。第一次産業就業者割合と持ち家住宅割合の判別がやや難である。

問6 地方圏の市街地を例に、日本の国土像を考察し、資料を正しく読み取る必要のある小問である。地図の中に距離を表すスケールがあることから大体の面積を想定し、人口がそのまま増えていないことから判断が可能であり比較的平易である。

第6問 国際河川であるドナウ川、ナイル川、メコン川流域の地誌に関する大問である。「現代世界の地誌的考察」からの出題であり、各地域の自然環境、文化、産業などから出題されている。各地域の自然環境の特徴や建築物の特徴、地域ごとの経済発展の度合いといった基礎的な知識は必要であるものの、三河川とも主要な国際河川流域を対象とした出題であることや、資料の読解はあるものの複雑な資料はなく、基本的な知識を活用する問いが多いため、難易度はやや易しいといえる。

問1 三河川流域の気候に関する小問である。気候が基本的には緯度による影響を受けることを理解し、各河川の緯度を理解できていれば、解答に結び付く。いずれも基本的知識と考えられるため、非常に平易な問題であるといえる。

問2 ハルツームとプノンペンの景観と特徴の説明の組合せに関する小問である。宗教分布・特徴、各地域（カンボジア、スーダン）の基礎的な知識を有していれば理解できるため、非常に平易な問題であるといえる。

問3 オーストリアを中心にして、ドナウ川流域の国境を通過する貨物量とその輸送手段別割合に関する小問である。貿易量・工業化の度合いやつながりなど複数の要素から解答を導き出す必要があり、思考力と判断力を問うことができる良問といえる。ただし、上流・下流の国が注で示されているため、難易度は平易な問題であるといえる。河川全体が地図に示されていることや主要河川であることも踏まえれば、注はなくても良かったと思われる。

問4 三河川流域の国々を含む、水資源の国外依存度に関する小問である。知識よりも思考力と判断力が問われる問いである。日頃から、地図を用いた取組を行っているかも問うことができる良問といえる。

問5 三河川流域の国々における経済発展に関する小問である。各河川流域にある国と経済状況や経済政策等を把握する必要があり、知識をもとに思考力と判断力が問われる問いであり、良問といえる。

### 3 総評・まとめ

本年度は、全体的に標準的な問題が多く、地図とグラフが多く利用され、地図と説明文を対応させる問題が多い。中には、地図と写真とグラフや表といった複数の資料を用いて考えさせる問題も見られる。地理では、位置や分布に着目させ、地域的特色や地域の変化、その要因や背景を読み取らせるとともに、地域が抱えている課題や地球的課題、それらへの対応にも着目させる。位置と分布、場所や地域的特色を踏まえて解答させる問題は、各大問でまんべんなく出題され、地域の変化について考えさせる問題も見られる。その一方で、地域が抱える課題や地球的課題についての問題について検討すべきであるとする。地域の課題にふれた問題は見られるが、地球的課題や国際協力の視点からの問題がほとんどない。

次に大学入試センターの問題作成方針について、前述の①知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題についてであるが、知識を問う問題は、「地理探究」の内容重視の出題となりがちである。本年度の入試問題においては、地図と景観写真などを照合しながら、既存の知識を用いて解答する問題がいくつか見られたが、なかには図表を見なくても説明文から解答できる問題や、図表を活かしきれない問題も見られた。②学習の過程を重視する問題については、探究したという設定は見られるが、調べたという程度にとどまっている。大学入試センターの試作問題で、探究的なプロセスを経て学習を展開する問題が示されている。③教科書を基礎とし、特定の事項や分野に偏りが生じないことについては、本問題は、教科書記載の内容を用いて、ほとんど解答できると考える。偏りについては、出題地域に偏りはなく、分野は、やや自然地理に関する問題数が多く見られた。④問いかけや資料の提示の仕方、レイアウトの工夫、表現や体裁に配慮することについては、問いかけは統一され、問題文や注に、解答するための手順や留意点が示され、レイアウトや表現も工夫されている。ただ、第3問の問3の地図サイズは小さく読み取りにくい。⑤地域を様々なスケールからとらえる問題は見られなかった。また、「地理探究」は系統地理的内容と地誌的内容から構成されているが、多くの入試問題を見ると、系統地理的内容がほとんどを占めている。両者のバランスのとれた問題を、共通テストでモデルケースとしてお示しいただきたい。

### 4 今後の共通テストへの要望

これまでの内容を踏まえ、要望したいことを三点指摘したい。まず、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う点について、今後とも様々な資質・能力を総合的に問う出題をお願いしたい。資料を読み取り、地域の特徴や背景を考慮して解答を導き出さなければならない問題がある一方、わずかな知識のみで地理的技能をあまり活用しないで解答できる問題も見られる。提示した資料をすべて扱わな

ければ解答できないかの確認もお願いしたい。次に、探究のプロセスをふまえて場面設定した問題と、地域が抱える課題や地球的課題と国際協力、その対応に関する問題を検討していただきたい。授業における探究活動の場面を想定した問題を設定するのも一案と考える。また、多様な受験者への配慮のため、地図や図表の見やすさとわかりやすさを今後とも追求していただきたい。

## ② 全国地理教育研究会

(代表者 小林 正人 会員数 約300人)

TEL 0422-46-4181

## 1 前文

平均点は 61.87 点であり、昨年度の 57.48 点に対してプラス 4.39 点と上昇した。共通テストへ移行して 6 年目、新課程 2 年目ということもあって昨年に引き続き世間の注目度も高い中、高等学校までの学習内容に沿った問いが多く、昨年度の傾向を見て対策してきた受験者にとって、大きな傾向変化がなかったという点で安心して取り組み、手ごたえも感じられたのではないかと。

## 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

平均点はプラス 4.39 点と上昇したが、易化とは単純に言いづらい。というのは、新課程 2 年目の今年度は、昨年度よりも資料が精選され、資料に付された説明文や選択となる肢文、下線部の引かれた部分の表現が簡潔になった印象がある。一方で、問題の設定や独自の Kategoriz の理解に時間を要す問いが見られ、これらにより簡単になったという印象を持ちづらかったと思われる。

大問構成は第 1 問「地球的課題（食料問題）」が「乾燥・半乾燥地域の生活文化の多様性」という生活文化からの出題に変わった。第 2 問は「地域調査（愛知県東三河地域）」から「地域調査（津軽平野とその周辺地域）」と、出題対象地域こそ変わったが、テーマは地域調査のままであった。これらの 2 大問は「地理総合」との共通問題であり、分量や難易度的に『地理総合、地理探究』受験者には取り組みやすかったのではないかと。第 3 問以降は、第 4 問の「産業」が「衣料品類の生産、流通、再利用・再資源化」に、第 5 問の「都市」が「人口と都市」となり、第 4 問の方が刷新感があり、テーマも現代的で好感が持てた。第 6 問の「地誌（インド洋）」は「地誌（ドナウ川、ナイル川、メコン川の流域）」となり、昨年度に引く続き広範な地域を対象とする地誌だった。全体の小問数は 30 問で変更はなかったが、第 4 問が小問六つから小問五つに、第 5 問が小問五つ小問六つに変更された。これらの小問数の変化は、受験者に大きな影響は与えなかったと思われる。

第 1 問 「乾燥・半乾燥地域の生活文化の多様性」 冒頭の大問であることを踏まえると、問題設定の理解や資料の読み取りに時間を要しすぎず、難易度も比較的抑えられたことは大いに歓迎したい。乾燥・半乾燥地域として括れる地域であっても、気候以外の諸条件の違いが生活文化の多様性を生み出していることに気付かせるような良問があった一方で、乾燥・半乾燥地域として括った大問中の小問として出題することに疑問の残るものも見られた。

問 1 何の様子を示しているのか判別しやすい写真と、簡潔な文章からなる小問で、肢文①～③の正しさも、④の誤りも明白だが、正答率はそれ程高くなかった。ナツメヤシの主な用途が自給的食料ということに対する理解が足りなかったか、油ヤシと混同した受験者がいたと思われる。

問 2 図中の三つの地点が、どのように水資源にアクセスしているかを考える組合せ 6 択問題。ウの地域での水資源の利用については、学習していない受験者も多かったと考えられるが、図からはウ付近の標高が高いことは明らかである。

問 3 乾燥・半乾燥地域というよりは、一般的には高山に見られる自然環境や生活文化として学習されているものが問われた。乾燥・半乾燥地域の大問中の小問として適切だったかは疑問が残る。地点③の海岸砂漠に関する出題の方が、大問のテーマに合致する地点として適当だったのではないかと。

問4 インドでの乳製品利用のために、牛の飼育頭数が多いことは容易に想起できる。モンゴルのカシミアヤギの学習がどの程度されているかは分からないが、飼育頭数の増加が砂漠化を抑制しないと判断できてほしいところである。砂漠化を促進させるものは何かについて、設問文を通して思考・判断させているところは新課程らしさが出ている。

第2問 「津軽平野とその周辺地域の地域調査」 多数の資料が提示され、読み取りに時間を要した小問もあったが、小問数が四つに絞られ、全体の解答時間への圧迫がそれ程大きくなかった点は昨年度に引き続き評価できる。昨年度出題された新旧地形図の読図は出題されず、地形図はため池周辺の地形の読み取りについてのものだけであった。昨年度のように、地形図・地理院地図の読図を通じた問いの作成を期待する。

問1 3市の地形の特徴を図1で捉えた上で、資料1で述べられているそれぞれの農作物生産の舞台となる「岩木川の下流域」や「海岸付近」、 「山麓」などのキーワードに着目しながら、対応する農業産出額のデータを選ぶには丁寧に解答する必要がある、時間を要した。図1のうち、地形を濃淡で示した地図aと、隣の各市の範囲を示した地図bを照らし合わせ、各市の特徴を正しく読み取れたかが正誤を分けたと思われる。出題対象に、市町村合併の結果、飛び地を持つに至った市が含まれ、資料1で文章化されている特徴に統合するのが難しかったのではないかと。この適切性は再考を願いたい。

問2 地形図の読図の基本となる谷の読み取りと、ため池から同心円的に離れていくように引かれた平野部の破線の意味が問われた。易問ではあるが、基本的な地理的技能を測るのに適した問いだった。

問3 地域の産業の持続可能性というテーマは評価したい。一方で、付加価値を高めての販売が低価格では行われないことが判断できれば解答できた点はやや残念である。

問4 東南アジアに含まれる国がどこかであるかと、南北半球でのリンゴ収穫期の違いについて問われた比較的容易な問い。地域調査の大問であるが、世界との結び付きにまで発展させている点は評価したい。

第3問 「世界の自然環境と自然災害」 様々な分野からバランス良く出題された大問だったが、難易度が高い小問もあった。基礎的な知識をもとに複数の資料を読み取って思考・判断させることは重要であるが、そうした設問数が多くなったり、初見の資料が多くなりすぎたりすると、解答に要する時間も長くなり、正答率も下がる。資料や文章を可能な限り精選した印象は受けるが、地理は初めて見る資料がたくさん出題される、難しい科目であるとの印象につながるような配慮は今後とも継続をお願いしたい。自然災害に関しては、危険性だけを扱うものでなかった点は評価したい。

問1 プレート境界やホットスポットの分布に関する標準的な難易度の問い。海底地形を示した図1について、イの海溝とウのホットスポットは見やすいが、アが単独で出題されていたら判断しづらい。もう少し海嶺がはっきり見て取れるものが良かった。

問2 二酸化炭素濃度の季節変動とその要因についての問い。光合成の盛んな季節に濃度が下がるため、北半球のハワイとアラスカは同一の時期に濃度が下がる。ニュージーランドの濃度の上下が小さく、読み取りづらかった点は修正をお願いしたい。観測地点について、例えばアラスカの面積は広大で、様々な自然環境の地点があり得た。リード文で地名を出すだけでなく、地図で位置を示しても良かったのではないかと。ニュージーランドと比較してハワイやアラスカの濃度の上下が大きい理由は問われていないが、それが推測できる資料や説明文があっても良かったのではないかと。

問3 日本の土壌分布に関する問いで、火山や平野の分布を手がかりにすれば正答を導ける。

受験者は初見の資料であったと思われるが，図の違いは読み取りやすく，文章も簡潔でキーワードを拾いやすかった。

問4 北アメリカの自然環境に関する問い。動植物や地形など，キーワードが明確で受験者も取り組みやすかったのではないかと。

問5 水資源量という言葉に注はあったものの，南アメリカとヨーロッパを判別するための諸要因についての思考・判断の難易度は高かったと思われる。これに人口の要素を踏まえる必要もあり，正解率は高くはなかった。

問6 設問自体は工夫された問いとして評価したいが，リード文が長く，初見の資料の説明や図の理解に時間を要す，難易度の高い問いだった。積雪期に北西季節風の影響で北麓の積雪量が多くなり，融雪型火山泥流が発生しやすいことを思考・判断できるかが問われた。

第4問 「衣料品類の生産，流通，再利用・再資源化」 「衣料品類」をテーマに第1次産業から第3次産業まで幅広く問われており，配分の工夫が感じられた。世界図を通じて，世界全体を大観させる小問が二つあったことも評価できる。一方で，全て統計数値に依拠した問いでもあった。産業に関する地理的見方・考え方は，統計数値の読み取りに限られるものではないはずであり，この点は再考をお願いしたい。

問1 図1については，ジュートと綿花から判断可能。亜麻の栽培分布は受験者にとって初見と思われるが，説明に混合農業との関連が深いことが示されており，ヨーロッパでの栽培が多いことが推測できるようになっていた。

問2 異なる2要素の掛け合わせ問題で，近年定番化している形式。綿紡績業が盛んだったところから，その後は事業所数が大きく減少し，後発の化学繊維製造業は新素材開発などで事業所数を維持していると考え，解答に結び付けられたか。資料1内の文章が，解答への道筋として機能しており，円グラフも特徴をつかみやすかった。

問3 労働力を指向して，工場が国を越えて移動していったと考えられたか。資料も一つ，該当国のみ解答する形式のため時間を要さないが，バングラデシュとベトナムの判断は受験者には難しかったのでは。

問4 消費活動が頻繁な飲食料品小売業で都市中心部の比率が高く，衣料品・身回品小売業も同じ傾向を持つと考えられたか。注が多く，「商業集積地区」や「都市中心部」が何なのかや，それらと「住宅地周辺」がどう違うのかなど，問題独自のカテゴライズや設定を理解するのに時間を要す上，難易度は高い。都市部と地方で，生活実感として真逆の印象を持っていることもあり得た。立地に関する問いなら，統計数値ではなく都市内での分布図をもとに思考・判断させた方が良かったのではないかと。

問5 途上国で中古衣料品の輸入が多くなると考えられ，空所補充も容易。

第5問 「人口と都市」 統計数値を基にした表や散布図，折れ線・帯グラフ，主題図など，出題にあたって資料が精選されている印象を受ける大問だった。一方で，問い方が似通っていたことや，第4問と同じく，都市や人口に関する地理的見方・考え方は統計数値の読み取りに限られるものではないはずであり，資料や問い方の工夫をお願いしたい。

問1 人口と農業生産に関する統計データから地域を判別する。旧ソ連諸国が含まれないとあるので，ヨーロッパで人口密度が高くなることや，北アメリカで1人当たり穀物生産量が多いこと，アフリカは人口増加の割に生産量が伸びておらず，1人当たり穀物生産量が減っていると考えられたか。

問2 ペルシャ湾諸国や西ヨーロッパ諸国で労働移動による外国人居住者が多く，その上で，EUという枠組みがあることでフランスの方が国外居住者が多いと考える。アラブ首長国と

フランスの判別が難しかったか。

問3 図2で示された人口の自然増加率を踏まえて、それに対応する人口ピラミッドを判別する問いで難易度は標準的。

問4 問題独自のカテゴリズや設定を理解するのに時間を要す上、難易度も高かった。「都市圏」を「中心都市」と「周辺地域」にカテゴリズしていたが、日本ではなくアメリカの都市であり、言葉だけではそれぞれどのような地域なのか受験者はイメージできなかったのではないか。ニューヨーク都市圏は「管理的・専門的職業」の割合が高く、自動車産業と結び付けてデトロイトの方が「生産・輸送職」が多いと考えれば良かったのか。例えば、デトロイト都市圏に絞って都市の内部構造を示し、中心部と周辺地域での職業割合の違いを読み取ったり、近年は郊外で新たな産業育成が図られていることなどを示す資料を読み取ったりするなどの出題方法もあったのではないか。

問5 三つの階級区分図とそのテーマに関する組合せ6択問題。受験者は都市部で高位になるものと、地方で高位になるものという発想で解き進めたと思われるが、第1次産業と持ち家の判断がつかなかったと思われ、正解率は低くなった。

問6 この小問のように、施設や交通網の立地や配置が地図としてきちんと示された資料の提示が望まれる。資料と肢文を照らし合わせれば正解自体は容易。

第6問 「ドナウ川、ナイル川、メコン川の流域」 三つの国際河川の流域が比較地誌的に問われた。昨年度の環インド洋に引き続き、ヨーロッパ、アフリカ、アジアにわたる広範な地域が出題の対象となった。このことで、これも昨年度に引き続き、系統的な分野からの出題との差異があまり感じられなくなっている。新しい視点で地域を切り出すことや、異なる地域を比較することを通じて、ある地域の特色を見出すことは地誌学習の重要な視点であるが、ある地域の特色を掘り下げて考察するような出題がもう少しあっても良いのではないか。

問1 ドナウ川のみ同緯度帯を流れ、気候帯の変化がないと判断できたか。気候帯の分布がおおむね緯度に沿うものであることを意識した作問であり、地理的見方・考え方を問う良問としたい。

問2 河川流域の都市の宗教や経済、歴史について問われた。写真も読み取りやすく、文章も簡潔だったが、やや知識を必要とした。

問3 オーストリアという、単独で取り上げられることの多くない国の物流について問われた。「ドナウ川周辺の国境」とはどのような国境であり、どこまでを「周辺」としたのかや、「オーストリアを通過するだけの貨物は除く」ことが何を意味するのかなど、問題独自の設定が理解しづらく、そのことだけで時間を要した。その上、国際河川という大問のテーマや、「上流側と下流側」というカテゴリズによって当然河川、つまり船舶が使われると考え、Dを船舶と判断した受験者が多かったと思われる。現代の交通手段は自動車が圧倒的に多く、ヨーロッパの貿易におけるドイツの中心性から考えると、示されている正答しかあり得ないのだが、問題独自の設定の難解さや、この大問に入れようとしたことの弊害が出てしまった小問だったのではないか。

問4 水資源に関する問いで、図と下線部を照らし合わせれば解答は容易。

問5 出題対象となった国際河川の流域として含まれる国を落ち着いて想起すれば、経済水準の判断と通貨に関する知識で解答できた。

### 3 総評・まとめ・要望

新課程2年目だけあり、既に述べたことではあるが、昨年度よりも全体の資料量や説明文の量が

精選されたことは評価したい。一方で，大問によっては統計数値の読み取りに関する小問への偏りが見られるなど課題も残した。また，初見の資料であるだけでなく，問題の設定や独自のカテゴリズ理解に時間を要する難易度の高い問いも見られた。それが解答することを通じて受験者に学び取ってほしいことのために考えられた手立てなら仕方ないが，同じことを問える他の提示の仕方があったのではないかと思われる問いもあった。地理は初見の資料がたくさん出題され，難しいとの印象が強調されていくことのないよう，今後の作問の工夫に期待したい。

今年度は地歴・公民科目での平均点の乖離が是正され，この点は評価できる。一方で，地理系科目の高得点の取りにくさは残っており，得点帯の分布の調整にも引き続き目を配ってほしいと感じる。

様々な出題の制約がある中で，現代的なテーマの大問を出題したり，新課程の共通テストにふさわしい資料探しとその提示の仕方に多大な労力を払ったりしていることは十二分に感じる。辛口な評価を付けた問いもあるが，今後も地球上の様々な事象に対して，地理的な見方・考え方を養い，事象の意味や将来像を構想させるような『地理総合，地理探究』の手本となる作問を願っている。